

## シラーの『オルレアンの乙女』について 5.

江坂哲也

### 承前

同タイトル 1. (「現代と文化」第124号, S. 1-26. 掲載)

ヴォルテールとシラーの「乙女」の意味

歴史と文学作品の関係

神の声, 第一の3種の神器

太子の仮宮殿では

同タイトル 2. (「現代と文化」第125号, S. 1-25. 掲載)

第二, 三の神器

魔女の出現

人間モントゴメリの声と神々の声

ブルグントの翻意とフランスの統一

同タイトル 3. (「現代と文化」第135号, S. 57-87. 掲載)

和解の後に, 栄誉の授与など世俗からの誘惑

「理性」の人トルボトの死

黒騎士とは?

兜の意味と剣の喪失

乙女の咎と苦悩

同タイトル 4. (「現代と文化」第137号, S. 39-69. 掲載)

同じ愛が社会の中では正反対に

英雄から魔女に

シラーの時代状況とその問題

魔女として捕虜に

### 魔女裁判を後悔するフランスの陣営

場が変わってフランスの陣営となる。乙女ヨハンナを魔女として追放すると、散りぢりになっていたイギリス軍が再結集し、攻撃の準備を整えている状況にフランス側は直面し、その混乱ぶりを表す三人の口論で始まる。「国王の所にお戻りを。我々はまた戦いを迫られ、豪傑の力が必要なこの時に、この共通な件を放り出し」(3247-50)、ここから出て行かないでくれと言う大司教の懇願に対してデュノワは、

なぜ攻められているのだ。どうして敵は  
また盛り返しているんだ。あらゆる手を尽くし、  
フランスは勝ち進み、そして戦争は終わった。  
その救いの乙女をお前らは追放したのだ、今からは自分たちで  
自助努力することだな。彼女がいないこの陣営など 3255  
俺は二度と見たくもないわ。

ドゥ・シャテル： 大司教の忠告を受け入れて、そのような  
返答で私たちを見限らないで下さい。

デュノワ： 黙れ、ドゥ・シャテル。  
俺はお前を憎んでいるんだ、お前の言うことなど聞きたくもない。  
彼女を最初に疑ったのはお前だぞ。 3260

ヨハンナに求婚し、魔女裁判でも、そして雷がいくら吠えようが、最後まで彼女の潔白を信じていたデュノワは乙女を追放したことに腹を立て、その責任追及の的を先ず国王をあの場合から退出させた、側近で友でもあるドゥ・シャテルに向けている。その険悪な空気を和らげようと大司教は、次々と彼女に不利な証拠が現れたため、皆がみな彼女を疑い始め、ひょっとしたらとぐらつき出したと、あの時の状況を思い出させ、

そんな驚愕の時、誰が吟味しながら 3265  
じっくり考える事などできたでしょうか。今は落ち着きを  
取り戻し、私たちのもとの彼女がこれまでやって来たことを  
回想してみると、何の非も見つけられなかったと分かったのです。  
私たちは今困惑しているのです、— 私たちはとんでもない間違いを 3270  
犯してしまったのではないかと。— 国王は後悔の念を感じ、  
ブルグント公は自分を責め立て、ラ・イール殿は絶望され、  
誰もが皆悲嘆に暮れています。

大司教は父親ディボの訴え出た魔女裁判では皆が彼女を疑い出し、彼女に不利な<sup>しるし</sup>印が続いて現れ、あのような結果になったが、後でよくよく考えてみると、彼女のこれまでの行いには何の非もなかったと言うことだが、それは彼女がライオネルに止めを刺さなかった前までのことであろう。先述で留意するよう断ったように、そこに駆けつけたデュノワもラ・イールもその戦いで彼女が手首に怪我をしている事を、そして彼女が聖剣を失った事も、さらに戴冠式の先導をするよう彼女にあの旗を持たせようとした時の彼女の拒むような反応なども知っているはずだ。何よりもなぜあの裁判で彼女は沈黙を守ったのか、これは最大の謎であるはずだが、大司教のこの台詞を聞くと、フランスの陣営では誰もそれを問題にしなかったようだ。明らかにシラーがそれらの事を些細なこととして彼らに忘れさせていると言えよう。それは彼女の罪を彼らから隠し、すなわちライオネルを殺さず逃がし、聖母マリアの命と戦場での規律に背いた事、その二つを彼女自身の「魂の内」の問題として、自らその始末をつけさせるためであろう。神はその罪を知っているが、フランス人は誰も知らない。それ故あの時ヨハンナが一言「私は悪魔と共謀したことはありません」と否定すれば、あの場にいたほとんどの人は彼女に付いたであろう。しかしシラーはそうしなかった。ボルテールが魔女裁判をパロディー化するため乙女ジャンを性女にしたが、そのレットルは歴史上の彼女に相応しくないと、シラーは感じたのだろう。そしてパロディーによって魔女裁判を笑い飛ばすのではなく、それを舞台の上から告発しようとしたと言えよう。すなわち人間は魔女裁判などで思想・信条を裁くことはできないこと、すなわち「魂」の内を問題とする「行為」(Handlung)ではなく、人間が客観的に知ることのできる「行跡」(Tat)しか扱えないこと、これを観客に示すためにそうしたのだろう。

しかしこの場では、乙女ヨハンナは魔女ではないと言う何の反証もないのに、そのレットルを突然はがし、逆に聖女扱いしてしまっただけで逆に不自然さを感じさせないだろうか。あの大司教の台詞「今は落ち着きを取り戻し、私たちのもとで彼女がこれまでやって来たことを回想し」という台詞の次に、「あなた様(デュノワを指す)が彼女の手首の傷はドンレミではなく、あのランス奪回での戦いで負ったものと思いだされ、ラ・イール殿も『あの時はびっくりして忘れていたが、確かにそうだ』と言われ」をシラーが挿入していれば、それに続く大司教の台詞、「てみると、何の非も見つけられなかった、と分かったのです」(3266-9)に繋がり、魔女から聖女への突然の反転という不自然さは解消されよう。

さて、それはともかくとして劇の続きに戻ろう。大司教の台詞に続いてデュノワは、

真理というものが

人間の姿をまどって現れるとすれば、

3275

彼女こそその目鼻立ちを備えているに違いない、

潔白、誠実、心の清純さがこの世のどこかに

にあるとすれば、それは彼女の唇、

彼女の曇りなき<sup>まなこ</sup>眼に宿っているに違いない、

大司教： 天が奇跡を起こし、仲裁の手を下さらんことを！ 3280

私たち死すべき者の目には見通せない

この不可解に啓示を与えられんことを！

しかし、このもつれがどの様にほどかれ、解かれようとも、

私たちは二つのうち一つを犯してしまったのだ。

地獄の魔術を武器に国を防御したのか、 3285

それとも聖なる乙女を追放してしまったかで、

どちらにしても天の怒りと罰がこの不幸な

国の上に下されることになるのだ。

庶子として生まれたデュノワは第3幕第1場で自分を「聖なる自然の神々の子」(1844f.)と呼び、社会的な嫡子という序列や身分に対して自然を盾に、騎士としての剛腕に訴えて戦い、これまで生きて来た。ここでも彼は乙女ヨハンナの評価を一貫して自然に基づいて下しているのに対して、大司教は全く神頼みで、彼には彼女が天に遣わされた乙女か、地獄の悪魔に仕える魔女か分からない。前に触れた国王の「天使裁判」も含め魔女裁判は、レッシングによれば神の右手に包まれた真理で、<sup>1</sup>それは人間には扱うことの許されないもので、どちらにしても「二つのうち一つを犯し」てしまった事になる。

その時そこに一人の貴族が現れ、羊飼いの若者がお目通りを願って、乙女のもとからやって来たと告げられ、デュノワはすぐ連れて来るように命じ、その若者ライモントが現れると、「どこにいる、乙女はどこにいるのだ」と彼に尋ねる。ライモントが前置きの丁重な挨拶を始めると、デュノワと大司教は「乙女はどこに」、「それを言え」と急かす。ライモントが彼女は魔女などではない事を、神とすべての聖者にかけて、私が保証しますと言い、それに続けて、

ライモント： フランス人は間違えてます、あんた方は

無実の<sup>もの</sup>女を、神に遣わされた乙女を追い出されたんです。 3300

デュノワ： 彼女はどこにいるのだ？ 言え！

ライモント： おいらはアルデンの

森の中を逃げるあの<sup>ひと</sup>女に付き添ってました。

そこで彼女はおいらに心の奥の奥を告白したんだ。

もし彼女があらゆる罪から清くなかったら、 3305

おいらは呵責に耐えかね、死にたいぐらいだ、おいらの魂は

永遠の平安に<sup>あずか</sup>与れなくてもかまわんぜ。

デュノワ： 天の日輪様でも彼女より清くはないわ。

彼女はどこに居るんだ？ 早く言え！

ライモント： 神さんがあんた方の心を  
 ひっくり返されたんなら — 急いで、彼女を救って下せえ！ 3310  
 彼女はイギリス側に捕まっています。  
 デュノワ： 何と、捕えられたと！  
 大司教： 可哀そうに！

このやり取りはライモントの丁寧な挨拶から始まり、ここに至るまでの長々とした説明に対して、彼女の潔白を初めから信じ、何よりも彼女の居所を知りたいデュノワのいらいら振りを余す所なく醸し出していて面白い。先ほど呈した私の苦言も、このようなシラーのレアールな<sup>せりふ</sup>台詞のやり取りにより、観客も読者も取り込まれ、劇が今後どのように進展して行くのかと前のめりになろう。それに続いてライモントが、その森の中で彼女は王妃イザボに捕まり、イギリス兵に引き渡されたと告げ、「あんた方を救ってきた彼女を、ぞっとするような死から救って下せえ」(3316-7)と懇願すると、デュノワは

武器を取れ！出陣だ！急を告げろ！太鼓を打ち鳴らせ！  
 兵すべてを戦いに動員せよ！フランス全てが  
 武装するのだ！名誉が取られたのだぞ！ 3320  
 王冠が、守護神がかすめ取られたのだぞ！  
 心血をすべて注げ！お前らの命を賭けるのだ！  
 日が沈む前に、乙女を解放するのだ！

第1幕はデュノワがオルレアン市を助けに出陣する側で、それに対し太子はそれを見捨てて退却する側と対立していたが、この場は随分違おう。この幕の第7場ではあの魔女裁判が皆で悔やまれ、反省され、続く第8場にはライモントがその乙女の危急を知らせに登場し、下層の人民の娘である彼女を救出するために、フランス全軍に出陣命令が出される。

#### 魔女の処分を巡る塔内での争い

第9場はイギリス陣営の見張りの塔で始まり、ヨハンナはそこに捕えられ、彼女が愛しているライオネルと共にいる。そこにファストルフが急いで入って来て、イギリス兵たちが怒って、乙女を殺せと迫っていると彼に告げ、さらに「あなた様でもそれを止めようがないでしょう。乙女を殺して、その首をこの塔壁から投げて下さい。彼女の流血だけが群がる兵たちの怒りを鎮めるのです」(3326-8)と進言する。イギリス兵にとって、兜の下から髪を振り乱し、仲間を皆殺にして来た乙女ヨハンナは初めから魔女と判決されているのであり、そのリンチを今執行しようとしている。ところで、このファストルフは第3幕第6場でイギリスの総司令官トルボトにつき

従っていた者で、自分が仕える主人の亡骸を敵から守ろうと抵抗し、まだ国王になっていない太子カールの戦死した勇者に対する騎士道に則<sup>のつと</sup>った態度に感服し、剣を捨てて捕虜になろうとしたが、帯剣した自由の身で主人を弔うよう許されていた。その彼が今この場にいると言うことは、カールは彼を捕虜にすることもなく自由にしたと言うことで、乙女ヨハンナはその頃イギリス人殺戮に明け暮れていたが、カールはそれとは違った道を守っていたことを示していよう。

それはともかくとして、そのファストルフがそう報告している所にイザボがやって来て、彼らが塔に押し寄せ、侵入し、盲目的な怒りにまかせ暴れ回ったら、我らは皆やられてしまうから、「こいつを差し出してやれ」(3333)と強要するが、ライオネルは、

押し寄せるがままにしておけ。怒り狂い、暴れ回らせておけ！

この城は強固だ。あいつらの意志(Wille)に強<sup>し</sup>い(zwingt)られる 3335

ぐらいなら、倒された塔の瓦礫の下に埋まった方がまだ。

— 答えてくれ、ヨハンナ！俺の大切な女<sup>ひと</sup>になってくれ、

それで俺は世界を相手にお前を守ってやるから。

イザボ： お前は男か？

ライオネルの「あいつらの意志に強いられるなら、・・・」と言う台詞は自由の問題を端的に表し、ヨハンナへの申し込みは勇ましく男らしいが、捕縛されている彼女の方はどう思うだろうか。次のイザボの台詞は、女のためイギリス軍を統括する総司令官の任を顧みないただの男になり、怒り狂った自分の軍勢に殺されるのも厭<sup>いと</sup>わない彼を非難していよう。ライオネルはその言葉を無視し、こう続ける。

お前の味方はお前を

追放したのだ、そんなひどい祖国にお前は 3340

もうどんな義務もないはずだ。お前に求婚した

あの卑怯者らはお前を見捨て、お前の名誉のために

戦おうともしなかったではないか。

だが俺は俺とお前の国の者(Volk)に抗して

お前を守り通してやる。— あの時お前にとって 3345

俺の命が大切だとお前は示してくれた。その時

俺は戦いの中で、敵としてお前に向き合っていたが、

今お前の味方は俺しかないのだ。

ヨハンナ： あなたは私にとって(mir)

私のフランスの民(Volk)の憎むべき敵としか見えません。

あなたと私の間には共通な(gemein)ものは何もありません。 3350

あなたを愛することなどできません、でもあなたの心を  
 私に寄せて下さっているのなら、私たちの両国民 (Völker) に  
 幸せ (Segen) を与えて下さい。— 私の祖国の地から  
 あなたの軍勢を引き上げて、あなた方が  
 征服したすべての都市の鍵を引き渡し、3355  
 略奪したものはすべて返し、捕えた者たちは  
 こちらに返し、神聖な協定を保証する人質を出して  
 下されば、私の国王の名において、  
 私はあなたに講和 (Frieden, 平和) を申し出ますから。

この様な状況では二人は敵同士で、愛と言うものを話し合えるための「共通」なものはない、これが彼への彼女の返答である。「私たちの両国民」とはフランスとイギリスの兵と家族、<sup>いいなづけ</sup>許婚などを表している。「イギリス人は皆殺しに」という神の命を守ることができず、ライオネルを愛してしまい、その愛を敵も含め人間一般に普遍化し、人間宣言し、自立した乙女ヨハンナがそれまでの総括をして、最終的に到達したものがこの彼女の講和提案で、これには勿論フランスの主権と自由を守ることも含まれている。彼女の「あなたの心を私に寄せて下さっているのなら、・・・」という提案を、このような状況下で結局ライオネルは受け入れないが、そのことは彼女のように一人への愛を敵味方の境界を越えた人間一般に普遍化できないライオネルの限界を示している。このヨハンナの提案には、シラーが完成予定の2週間前にゲータに宛てたあの手紙で、彼女の「預言者としての役割に対する主人公としての要求」が、はっきり具体化されていると言えよう。この「預言」は少なくとも「殺せ」と命じた旧約の民族主義的の神のものではなく、戦争で殺し合いをするのではなく、それを止めようとするもので、彼女の乙女らしい情感と人間的理性が生み出した「両国民」(Völker, 原文 3353) 相互のためになるものであり、彼女の師である新約のイエズスの「汝の敵を愛せよ」、「平和を創り出す人たちは幸いである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」<sup>2</sup> という人間全体に対するものである。クラウゼヴィッツ (C. v. Clausewitz 1780-1831) は「武力闘争とは、他の手段による政策の延長である」という言葉を含む『戦争論』 („Vom Krieg“ 死後 1832-37 出版) を著したが、イギリスに侵略され、神により戦場に送られたヨハンナは再び始まろうとしている武力闘争を止め、政治・外交的に解決する「講和条約」を預言的に提案していると言えよう。

この彼女の提案に対してイザボは「縛られているお前が我らに法 (Gesetz) を下そうと言うのか」(3360) と拒否し、彼女の両国民共に血を流さないで済む相互の幸せ (Segen, 原文は 1352) への希望は失せた。カントのあの定言命令は道徳的に個人がそうしようとする意志 (Wille) の格率が「普遍的な立法」(allgemeine Gesetzgebung) の原理に合致することを求めているが、彼女の提案はこのような状況では拒否され、「皆 (all) が共通して (gemein)」賛成してくれなかった訳である。しかし、神の子イエズスの「法」(Gesetz) になっているのではないだろう

か。

ヨハンナはイザボの拒否にもめげず、必死にライオネルにこう訴える。

遅くなる前にそうなさって、あなたにはそうするしかないのですから。  
フランスは決してイギリスの鎖に繋がれる事はないでしょう。  
そんな事は絶対起こらないわ！それよりあなたの軍勢の  
墓地が遠くまで広がることになりましょう。  
あなた方の最良の人たちは戦死してしまったのです。 3365  
安全に国に帰ることを考えて下さい。あなた方の名声は  
地に落ち、あなたの方の力も失せたのです。

「安全に帰る」とは、講和が成立すれば、敗走するイギリス軍を追走などすることもないから、流血も損害もなく母国に帰還できると言うことである。それでヨハンナも彼女が今も愛している(?)彼も生きて行ける事になり、二人の愛はその後の相互努力で実を結ぶかも知れない。さて、そんな憶測はともかくとして、このヨハンナの台詞が腹に据えかねたイザボはライオネルに、「お前はこんな気違い女の反抗に我慢できるのか」(3368)と怒っていると、部隊長が急いで入って来て、「司令官殿、早く、急いで軍を戦いに向けて下さい。フランス勢が軍旗をはためかせて追っています、この谷中が彼らの武具で光っています」(3369-71)と告げる。それを聞いて、

ヨハンナ： フランス勢がやって来る！今だぞ、高慢な  
イギリスよ、戦場に繰り出せ、今こそ元気よく戦う時だぞ。  
ファストルフ： 馬鹿な女だ、喜ぶのは早いぞ。  
お前には今日という日の終わりは見られまいに。 3375  
ヨハンナ： 私の兵(Volk)は勝ち、そして私は死ぬでしょう。  
あの勇者たちはもう私の腕を必要としないのです。

ヨハンナの両国共に血を流さなくても済む講和提案は真面目に受けてもらえず、お流れになった。そして彼女は自分の国の軍が攻め寄せて来たのを喜び、それに対応しようとしているイギリス側を茶化している。彼女はもちろん自国軍の進攻が彼女を救出するためであることを知らない。彼女は魔女として追放された身で、今でもそうであると思っている筈で、それ故このフランス軍の出撃は再結集したイギリス軍と最終的な決着をつけようとの事と考えているに違いない。しかし、彼女はあの様な仕打ちにもかかわらず、いざ戦いとなれば、あくまでフランス人として祖国の側に立ち続け、フランスの勝利を願いながら自分の死を予感している。その彼女の最後の言葉を聞き咎めて、ライオネルは彼らを「勇者たち」ではなく、乙女ヨハンナが出現するまでは20回も連戦連敗の「腰抜けども」と侮り、フランスを救った「その乙女をあいつらは追放した



のだ。— ファストルフ、来い！またあいつらに同じ目を会わせてやろう」（3383-4）と言い、王妃イザボには護衛として50人の騎士を残して行くから、この戦いが決するまで塔に止まり、この乙女を見張っていてほしいと頼む。ファストルフが、こんな凶暴な女は戦場に出る前にここで処分して、背後の憂いを無くした方が良いではないかと心配すると、ライオネルはヨハンナに「縛りを解かない」（dich nicht zu befreien, 3391）と約束させようとするが、彼女は「私の唯一の願い（Wunsch）は解放だ（mich zu befreien, 3392）」と「自らを自由にしたいとの意志」を表す。そうさせないために、イザボは彼女を重い鎖（Fessel, 3393）で三重に体と腕を縛るよう命令する。彼女は一重から三重の重い鉄の鎖でぐるぐる巻きにされ、彼女の望んだ自由（Freiheit）は絶望的に奪われた訳だ。この乙女にライオネルは、

お前がそう望んだ（willst）のだ！お前が我らにそう 3395

させ（zwingst）たのだぞ！ まだ間に合うから、フランスを捨て、  
イギリスの旗を持ってくれ、それでお前は自由（frei）になり、  
外で怒りたけている兵どもがお前に仕えるようになるのだ。

ファストルフ： 早く、急いで、司令官殿！

ヨハンナ： そんなことは言わないで！

フランス勢が進攻して来ます、自衛なさって！ 3400

（トランペットが鳴り響き、ライオネル退場）

戦場に向かおうとしているライオネルの彼女に対する依頼を、私は「縛りを解かない」ようにと原文に忠実に訳したが、和訳としては逐語訳の「自らを自由にしない」よりは少し増しかも知れないが、「逃げ出さないで」とか「大人しくしている」の方がはるかに良いだろう。しかしシラーがそこで問題にしているのは「自由、解放」（Freiheit, 形容詞は frei, 動詞は befreien, 3391, 2）であり、その反対がヨハンナの陥っている「強制、束縛」（Zwang, Fessel, 3390, 3）であるため、その原文を生かすため、そう訳さざるをえなかった。自由のない、束縛・強制されたままの状態で愛を語るなどヨハンナにとってありえないが、ライオネルは縛る鎖を三重に増やさざるを得なくなった理由として、彼女がそう「望んで」（willst）、我らにそう「させた」（zwingst, 強制する）と返しているのは面白い。そしてライオネルは彼女を追放した祖国を捨て、彼女の敵国であったイギリスの旗を持って戦うよう約束してくれ、そして彼女がそれを受け入れてくれれば、三重の縛りから「自由」になり、戦場で仲間を殺して来た憎き魔女をリンチにしようとして押し寄せるイギリス兵も、彼女が自分たちの旗を持って率いる戦女（せんし）になれば、その兵たちも彼女を戦友と見なし、さらに総司令官の将来の奥方様として彼女を敬い「仕える」事になるのであって、それはそれで理にかなってしよう。しかし、フランス人としてのヨハンナの人格と意志の自由は無視されている。ライオネルの理は物理の力学分野でのみ通用するもので、例えば向こうの敵から奪った武器はベクトルを逆にするだけで、こちらでも同様に使えるが、人間は自由意

志と感情を持っているのであって、武器という「道具」とは同じにならない。イギリス兵の憎しみという感情もそれほど簡単に消え失せるか疑問であり、カントの間人は「目的」として存在しているものであり、「手段」として扱ってはいけないと言う主張に反している。<sup>3</sup> 結局ライオネルは前総司令官トルボトと同じで、力学・数学的にしか考えられない軍人であったということになる。

ヨハンナはライオネルのその提案に「そんなことは言わないで」(Spare deine Worte) と答え、さらに「自衛なさって」(verteidige dich) と付け加える。原文の >Worte< はライオネルの台詞全体の提案を受け、それを「保存する、胸にしまって置く」>sparen< ようにと彼に命令しているが、和訳する際に「黙れ」でも、または「そこまで言ったら、お終しまいよ」でも良いだろう。しかし、これらは彼女のライオネルに対する拒否が強く前面に出ているため、彼を心から憎み、もはや少しも愛していない事を表してしまうだろう。次の >verteidigen< も再帰代名詞 >dich< を目的語として取っているから、自らを「防御する、守る」という意味で、「フランス勢が進攻して来る」と次の「自らを防御しろ、自衛せよ」の二文はコンマ一つで結ばれている。そのコンマの意味をどう採るかで「～来るから、対抗して戦え」か、または「～来るが、あなたの身を大切に」とも解せるだろう。前者のように採れば、戦に出るライオネルを茶化して「お前なんかフランス軍にやられてしまえ」と、後者のように解すれば、「我が身大事と考えて、逃げるが勝ちよ」とまでもなるだろうか。とにかく、乙女心の内はここに至っても、まだ分からない。この彼女の言葉を彼がどう採ったかは分からないが、強情な乙女だが「大切な女ひと」と思いがらであろうか、とにかく急いで彼は戦場に去って行った。

### 乙女の二つの罪はどう償われるか？

ライオネルは去った。その後を追う前にファストルフは急いで、

王妃様、あなたは何を為すべきか、お分かりのことと思うが、

幸運が我らに顔を背そむけ、我らの兵が逃走するのをご覧になられたら、――

イザボ：*(短剣を抜きながら)* 心配には及ばん。

我らの敗戦を見るまで、こやつは生かして置かぬわ。

ファストルフ：*(ヨハンナに)* 何がお前を待っているか分かったな。 3405

さあ、お前の兵の武器に「幸あれ」と祈っている。*(退場)*

ヨハンナの過酷な運命は決まった。イギリス側が勝てば、彼女の唯一の味方であるライオネルは戻って来て、彼女を守ってくれるだろうが、彼女の応援するフランスに勝利の兆しが見えた時は、彼女を迎えに来るのは死神である。

場は第11となり、塔に残ったのはヨハンナと彼女の生殺与奪せいさつよだつの権を握る王妃イザボとその警

護のため残された50の兵である。ヨハンナはフランス兵を励まそうと、こう祈っている、

聞こえるわ、

あれは私の兵の行軍マーチだわ！ 私の心に響き渡り、  
勇気づけ、勝利を告げているようだわ！

イギリスには破滅を、フランスには勝利を！ 3410

さあ、勇敢なる者たちよ、進め！ 乙女の私があなた方の  
近くにいます、乙女はかつての様に旗を持って、  
あなた方の先頭に立つことはできません、— 重い鎖が  
私を縛っているの、でも私の魂はこの牢から、あなた方の  
歌う戦いの音の翼に乗って、舞い上がって行くのです。 3415

戦闘の轟きは聞こえて来るが、その成り行きは見えないため、イザボは一兵士に塔の上に登って、見晴らし台から戦況を報告するよう命令する。この今で言えば実況放送により広大な戦場と舞台となっている塔の内は繋がりが、<sup>4</sup>塔外のフランスとイギリスの勝敗を賭けた戦いが塔内のヨハンナの運命を同時的に決定することになる。すなわち彼女の応援するフランスに幸運の女神が微笑めば、イギリス側の性女<sup>5</sup>イザボが短剣で清き乙女を魔女として処刑し、死神に託すことになる。その運命を決める実況放送が間もなく始まる。

イザボ： 何が見える？ 3420

兵士： もう両者が衝突しております。  
バルバー馬にまたがった猛者が、虎の毛皮をまとい、  
近衛騎兵を率いて前に飛び出て来ます。

ヨハンナ： デュノワ公爵だわ！ 勇敢な闘士よ、  
元気はつらつと戦って！ 勝利はあなたと共に。

兵士： ブルグント勢が橋に  
攻撃をしかけています。 3425

イザボ： あの裏切り者め、  
あいつの不実な心臓に10本の槍をぶち込んでやれ！

兵士： ファストルフ卿が男らしく、あ奴に抵抗を。  
両者とも馬を下り、男と男の決闘を始め、  
ブルグント勢と我らが兵も戦闘開始。

イザボ： あの太子は見えないか？ 彼の王家の印は  
識別できないのか。 3430

兵士： 何もかもが

土煙の中、ごちゃ混ぜで、何も見分けられません。

ヨハンナはデュノワの愛を受け入れられなかったが、同じフランス人として戦う彼を応援している。イザボは、イギリスとの盟約を破りフランス側に寝返った（戻った）ブルグントを、今でもなお憎んでいる。そして彼女はイギリス王室に自分の娘を嫁にやり、その娘が産んだ子供をパリでフランス国王として即位させたことから、ランスの大聖堂で国王に即位した息子カールに対しては、未だに「太子」と呼び、さらに何よりも母である自分の性女ぶりを咎めたことで憎しみを抱いている。土煙で良く見えないと言う報告を耳にすると、その詳細を知りたいヨハンナは、自分の目ならどんな小さなものも見逃さず、「飛んでいる野鳥のウズラも数えられるし、どんなに空高く飛んでいても鷹だと分かるのに」（3435-6）と苛立つ。兵士の実況伝達は続き、イギリスの最高指揮官、すなわちライオネルが包囲されていると聞くと、イザボは自軍の敗戦を察知し、「死ね、運がなかったな！」（3443）と、短刀をヨハンナにサッと向ける、

兵士：（早口で） 包囲が解かれました。

ファストルフが雄々しく敵の背後を突き、一

最も密集した敵の群れを打ち破っています。 3445

イザボ：（短刀を引っ込め） あれはお前の守護天使がしゃべったのだ。

キリスト教では、各人には守護天使が付き、その個人を守ってくれると言う。ライオネル救援の実況を伝達した兵士の言葉がその天使の役を果たしたと言うわけだ。それは自分の命は永らえられたと言うことであるが、皮肉なことに、フランスの勝利を願っているヨハンナの期待に反している。ここでシラーは彼女に、「ああ、私の魂は真っ二つに分かれ、一方ではフランスの勝利を願い、他方ではあの男の助かったのを喜んでいる」という台詞をあてがっても良いと思うが、彼はそうしていない。彼女は彼を愛することを通して人間宣言し、「殺したくない、殺せない」という人間一般への愛に目覚め、神の子である彼女の師イエズスの課した過酷な運命を受け入れ、人間としての新しい生き方を追求していたが、ライオネルが彼女の講和の提案を受け入れず、こちら側に付けと要求した時以来、「イギリス人は皆殺しにしろ」と命じた旧約の民族主義的なあの神のもとに戻ってしまったのだろうか。それはともかくとして、実況中継は続き、

兵士： 勝利です、勝利だ！ 逃げています。

イザボ： 逃げているのは誰だ？

兵士： フランスです、ブルグントが逃げ、

広野は逃亡勢で覆われています。

ヨハンナ： ああ、神さま！ それ程まで私をお見捨てとは！

兵士： あちらでは深手を負った者が運ばれています。 3450

大勢の兵が助けに駆けつけ、やられたのは身分のある者です。

イザボ： 我が方のか、それともフランスのか？

兵士： 彼の兜を脱がせています、デュノワ男爵です。

こうして、乙女の潔白を彼流に信じ続けたデュノワは舞台から退場し、ヨハンナは力を込め懸命に鎖に掴みかかるが、「私は鎖に繋がれた女に過ぎないのか！」(3454)と絶望していると、

兵士： やや、しかと見ろ！空色のマントを着けているのは誰だ、3455  
金の縁飾りがついている。

ヨハンナ： 私のご主君、王さまだわ。

兵士： 彼の馬はおどおどして、— もんどり打って、— 倒れた、  
彼は必至に身をよじて、下から出ようともがいている。

(ヨハンナはその中継を聞きながら、鎖を外そうと激しく体を動かす)

我が勢がすぐさま全速力で駆けに、駆けて、—

そこに到達、— 彼を取り囲んでいます。3460

ヨハンナ： ああ、天にはもはや天使がないのか！

イザボ： 今だぞ、今こそ、フランスの救い女、救ってやれ！

「ヨハンナはひざまずき、(中継を一引用者) 圧倒するような激しい声で祈る」と、ト書きにあり、13 詩行に渡る台詞が続くが、これについては 3468 から 76 の 9 詩行を「1」で紹介したので、<sup>6</sup>ここでは 3 詩行は別として、後は略して訳出することにしよう。後半の省略される所に含まれるジムゾンの 6 詩行に渡る受難奇談は旧約にあり、これは彼女がその神に祈っていることを示している。マリーアを仲介して伝えられた旧約の神の命を破ってしまった彼女は、その罪を贖おうとしているのであろうか。だが、その神はアダムとエーファをエデンの園から追放した神であり、それほど柔だとは思われないが、どうだろうか。

ヨハンナ： 神さま、お聞きください、困り切って、天を仰いで  
あなたに、熱き祈りのような願いをこめて、  
あなたの居られる天に、私の魂 (Seele) をお送りします。3465

あなたは蜘蛛の巣の糸を

船綱のように強くでき、

あなたは全能ですので、この鉄の鎖を細い蜘蛛の糸に

変えることなど簡単にお出来になりますわ —

あなたが望めば、この鎖は解け落ち、3470

この塔の壁も裂けてしまいますわ —

「天に魂を送る」とは彼女の命を差し出すとことである。そしてこの最後の詩行に、ジムゾンの奇談が続き、「あなたを信じて、彼は牢の柱をしっかりと掴み、身をぐっと傾け、その建物を倒壊させました」(3474-6)で終わる。

私は「2」の「人間モントゴメリの声と神々の声」の項で、その場でのヨハンナを「崇高」な感情で満たされていると言うナチオナル版の注に異を唱えたが、<sup>7</sup>その美的感情は将にここからの彼女の「魂」を占めることになる可言えよう。シラーは「崇高について」(„Über das Erhabene“, 1801)で「美」と「崇高」を対比して、こう書いている。「自然が私たちの生涯の道連れに与えてくれたのが二柱の守護神(Genien)である。その一方は付き合いの良い快い神で、私たちのためにその陽気な遊び(Spiel)によって苦勞の多い旅路を短くして、必然性(Notwendigkeit)の鎖を軽くし、喜びと戯れたわむの気分で導いてくれるが、それは危険な領域に至るまでである。そこでは私たちは純粹な精神(Geister)として行為し(handeln)、肉体的なものをすべて脱ぎ捨て、真理(Wahrheit)の認識と義務(Pflicht)の完遂にまで向かわなければならない。そこでその守護神は私たちから去って行くのだが、彼の領域はただ感覚界だけだからで、彼の現世の翼では飛び越えることはできないからである。しかしその時、他方の守護神が現れ、彼は無言で厳しいのだが、私たちをたくましい腕で目の眩むような深淵を越えて運んで行く。

これら守護神の前者の内に人間は美(das Schöne)の感情を、そして後者の内には崇高(das Erhabene)の感情を覚える。確かに美も既に自由(Freyheit)の表現であるが、私たちを自然(Natur)の支配力(Macht)を越えて高め、あらゆる肉体的な影響から解き放つような自由ではなく、私たちが自然の内で人間として享受する自由の表現なのである。私たちが美に接して自分を自由とを感じるが、それは感覚的(sinnlich)衝動が理性の法(Gesetz der Vernunft)と調和しているからで、崇高に接して自分たちを自由とを感じるのは、感覚的衝動が理性の立法(Gesetzgebung)にいかなる影響も及ぼしていないからで、精神(Geist)がここでは自分自身の法以外のいかなる法もとの下にも居ないかの様に行為する(handelt)からである。<sup>8</sup>

「行為」について先述した『優美と品位』では、人間は「自然的必然性の連環に自らの意志で干渉し、自らの内に全く新鮮な一連の現象を創り出す特権を持っている」と書いていた。その「自然的必然性」を自らの意志で断ち切り、自分の「新鮮な一連の現象」を創り出すこと、この特権が「自由」であり、「自立・自律」である。それが「美」の段階では自然と何とかやりくりし、調和することによって可能であったが、その域を越えなければ、すなわち自然的・肉体的な制約から自らを解き放たなければ、「自由と自律」を維持できない危険な領域では、この「崇高」という守護神が現れるという訳である。

三重の鎖で縛られ「自由」を奪われているヨハンナは、応援するフランス側に国としての「独立と自律」を完成させる勝利の兆しが見られればイザボに処刑され、イギリス側が勝てばライオンネルが戻り「命」だけは守ってくれるだろう。しかし、それは彼女の「魂」にとって「自由」でも「自律」でもなく、「愛」を育はぐくめる状況には遠く、ただの生物的「命」を永らえるだけである

う。そういう状況で彼女は、「国王包囲」という中継の声を聞き、「魂を天に送り」祈っていた。そして、再び実況中継の音が聞こえて来る。

兵士： 勝利です，勝利だ！ 3476

イザボ： どうなった？

兵士： あの国王が

捕えられています。

ヨハンナ：（飛び上り）神さま，お願いですから！

彼女は両手でグッと鎖を掴み、ブチッと切って、すぐ近くに立っていた兵士にサッと突進し、彼から剣をパッと奪うと、外に飛び出して行く。皆ただただ驚いて、彼女を見送るのみ。これがシラーのト書きである。これによれば、鎖を切ったのは彼女である。しかし長い間を置いて、イザボは「何が起こったのだ。夢でも見ていたのか。あいつはどこへ行ったんだ。あいつはどうやってツェントナー（50kg—引用者）もあるこの鉄の鎖を切ったんだ」（3479-80）と、自分の目で確かに見たのに、信じられないと啞然とする。ヨハンナは旧約の神に祈っていたのであり、その神が鎖を切らせたことは確かである。シラーはト書きで、「彼女はライオネルが塔の隅に置いて行ったあの聖剣を見つけると、それにサッと手を伸ばし、・・・」と書いていても良かったが、そうしなかった。彼女が手にしたのは神の威力が宿ったあの「他律」の聖剣ではなく、敵兵から奪った普通のもので、「自律」した彼女の自由になる物であった。その剣で遅ればせながら、マリアアから告げられた旧約の神の命を果たす、すなわちライオネルはもちろん、イギリス兵を皆殺しにしようと言うのであろうか。これまで論じて来たように、彼女にあの雷鳴で「父なる神は去られ、新しい運命を課そう」と告げ、彼女の師となったのはその父の子イエズスであった。その子が「乙女は私の意に近づいているようにも思われますが、彼女がこの後どうするか見て、私の意にかなったら召したいと思えますから、この乙女の願いを叶えてやって下さいませんか」と父に頼んだのではないだろうか。彼女が天に送った「魂」を最後に迎えに来るのが旧約の神か、その子イエズスカで明らかになるだろうが、そういう様々の疑問や憶測を残しながら、舞台は終局に向かって進んで行く。

見晴らし台の兵士は塔内の出来事を知らず、戦場に生じた新しい事態の中継を続ける。

兵士： 何と、あいつには翼があるのか。疾風が乗せて

下に運んで行ったのか。

イザボ： あいつはもう下に居るのか。

兵士： もう戦場の

ど真ん中を進んでいます。あれの走りは早すぎて 3485

目では付いて行けません。— こちらかと思えば、— もうあちらに—

私の目には同時に色々な所にいるように見えます！

— 女は兵の群れを分けて進み — 兵は皆女を避けて、道を空けます、

フランス勢は踏み止まり、再び反撃に出ています。

— おお、情けない！ 何てこった！ 我が兵は皆、次々 3490

自ら武器を投げ捨てて、我が方の旗は次々地に落ちて —

イザボ： 何と？あ奴は確かだった我らの勝利を奪おうという気か。

兵士： ちょうど今あの女が国王の所に迫って、— そこに今

到達し、— 激しく突っ込み、合戦の渦中から国王を奪い返しています。

乙女ヨハンナの目的は、ライオネルを第一に、そしてイギリス人は皆殺しにして、遅ればせながら旧約の神の命を果たすことではなく、彼女を魔女として追放したにもかかわらず、その国王を救うことだったのだ。その目的地に到達するまでの彼女の行為は、第1幕第9場で彼女の初戦を「それは戦い (Schlacht) などと呼べるものではなく、まさに屠殺 (Schlachten) でした」(981) と報告したのとは全く違って、この実況中継では、イギリス兵の群れを分けて進むが、後に死体の山ではなく、進んだ跡の線を残すのみである。もちろん兵たちは魔女の再出現に驚いて、逃げるからであるが、かつての彼女はあの殺人鋼を振りかざし逃げる者も追い、その墓を延々と築いていたことを思い出して見れば、その違いは明らかであろう。彼女は自分の意志で「自由」になるあの並の剣で切りかかって来る敵の剣を振り払いこそすれ、敵兵を「屠殺」していない。

先ほどの中継では「あの国王が捕えられています」と伝えられていたが、その後フランス勢が助けに馳せ参じ、国王を巡る両軍の戦いという転回になったのであろう。そこに飛び込んだヨハンナの手には並みの剣しか握られていないが、無事に彼を救出するという結果を取めるだろうか。中継は「— ファストルフ卿は倒れ、— 総司令官は捕えられました」(3495) と続くが、その2件の報告はダッシュで区切られ、それが国王を巡る地点での時間的経過を表しているのか、中継兵の視線を空間的に移したためのものか、それは分からない。とにかく、ファストルフは彼の仕えていたトルボトを自由な身で葬ってやるようカール太子に解放された自分の命をこの決戦で落し、乙女の欠けたフランス軍なら楽勝と勇んで出陣したライオネルは、乙女の講和提案を受け入れておけば良かったと悔やみ、この敗戦により今頃塔内では愛する乙女はイザボに処刑されているだろうと悲しんでいるのか、それらの疑問や憶測に対してシラーは何も語らせていない。ファストルフは誰にやられ、ライオネルは誰に捕縛されたのかも不明で、二人はそれぞれ戦いの舞台から退場させられている。

イギリスの敗戦が決定的になったことを知り、イザボは「もう聞きたくない。降りて来い」(3496) と、兵士に中継を中断するよう命令する。「王妃様、お逃げを！襲って来ます、武装兵が塔に押し寄せています」(3496-7) という最後の報告を耳にしても、彼女は剣を抜いて、残っている兵士に戦い抜くよう命令する。



そこにラ・イールがフランス兵を率いて来て、王妃に<sup>うやうや</sup>恭しく、彼女の騎士はすべて降伏し、もはや抵抗しても無駄だと告げ、「どこへでもお好きな所へお連れせよとの、私に与えられた任務をお受け入れ下さい」(3502-3)と伝えると、イザボは「あの太子の顔が見えない所なら、どこでも良いわ」(3503-4)と、抜いていた剣を渡す。彼女の息子カールはラ・イールに、母が望むように丁重に扱うよう命令したのであろう、そして、その母親は自分の素行を<sup>いま</sup>諫めた息子を最後まで国王と認めようとせず、性女のまま舞台を去る。

そして、最終場の第14場の舞台では、風にはためく旗を手に多くのフランス兵が後部を埋め尽くしている。その前に国王とブルグント公爵が立ち尽くし、その二人の腕には致命傷を負ったヨハンナが抱かれているが、彼女には生きている気配はない。二人はゆっくりと前に進み、そこに国王の愛人アグネス・ソレルが走り込んで、

ソレル：*(国王の胸に飛び込んで)*

あなたは救い出され (befreit) — 生きて — 再び私のもとに！ 3505

国王： わしは救い出されたが、それにはこのような代償が！

ソレル： ヨハンナ！ まあ、死んでるわ！

ブルグント： <sup>い</sup>逝ってしまったのだ！

ご覧なされ、ひとりの天使が去って行くのだ！ この姿をご覧、

苦しみもなく安らかに、子どものように眠っている！

彼女の顔には天の平安な調べが漂っている、 3510

息でこの胸が膨らむことはもうないが、この温かい

手にはまだ生気が感じられる。

国王： 彼女は亡くなって、もう目覚めてくれないのだ。

この目はこの世のものを二度と見ることもないだろう。

既に彼女は清い魂となって、あちらを漂っていて、

我らの心痛も、我らの悔悟も知ることはないのだ。 3515

この国王の台詞から、あの兵士の現場中継ではっきりしなかった事が明らかになる。乙女ヨハンナは国王を救い出そうと戦いの渦中に飛び込み、自らを犠牲にして致命傷を負ったのだから、もはやファストルフを倒し、ライオネルを捕える事などできなかったのだ。彼女の目的は旧約の神の命を遅ればせながら果たすことではなく、国王を救うこと、すなわちフランスの主権と「自由」を守り、彼女のあるべき国<sup>9</sup>を創ることにあったのだ。ブルグントは彼女の死に顔を魔女などではなく、清い天使のようだと表現し、国王はあの一連の魔女裁判を悔いて、彼女に謝罪したかったが、それをもはや果たせなくなってしまった事を嘆いている。すると、ソレルが「目を開けたわ、生きていますわ！」(3517)と叫び、ブルグントは「墓から我らのもとに戻って来たのか」(3517-8)と驚く。シラーはこのロマン的劇で「復活」をも舞台に上げたのか。

彼女は起き上がり、自分の足でしっかり立ち、見回して、

ヨハンナ： 私はどこにいるのかしら。

ブルグント： お前の兵 (Volk) のもとにだ。ヨハンナ、味方の所だぞ。 3520

国王： お前の二人の友だちの、お前の国王の腕の中にだ。

ヨハンナ：(ジーッと彼を見つめて)

いいえ、私は魔女なんかではありませんわ！ 決して

そんな者ではないわ！

国王： お前は天使のように聖なるもの (heilig) だ、

それなのに我らの目が闇に覆われていたのだ。

国王カールは、彼女を腕で支えているのはブルグントと自分の腕だと言っているが、その二人を「友だち」(Freunde, 味方)と表現している。その前にブルグントは「味方」(Deinen, 身内)と表現していたので、ここでは「友だち」と訳した。カールはヨハンナに第3幕第14場で王家に次ぐ貴族の位を授けたが、ここでは上下関係の臣下としてではなく平等な友人として扱っている。寒村ドンレミの人民 (Volk) である乙女が友であるということは、カールは自分を「人民の国王」(Volkskönig)と宣言していると言うことになり、これで彼女がプロローグの第3場で「そんな王が私たちと、父と子の関係になれるの」(365)と言っていた夢が実現できたと言えよう。

そして、ここで彼女は「魔女ではない」と言っているが、彼女は国王が既に彼女を魔女として追放したことを悔いて、その彼女を救い出すために出陣して来たことを知らないから、こうして我が身を犠牲にして国王を救出したことにより、ライオネルを愛し逃がし、軍律を破ってしまったフランス社会への罪 (Verbrechen) を贖<sup>あがな</sup>い、身の証しを立てることができたとの思いからであろうか。そのヨハンナに、国王カールはあの時我らの「目が闇に覆われていたのだ」と、今生での謝罪ができた訳である。この短い彼の言葉は、あの時父親が突然出て来て、娘を魔女だと告訴し、その印として彼女の腕の傷を見せ、急に雷が鳴り出し、人々は恐れおののき逃げ出すという状況に惑わされたことを表していよう。彼女は曲りなりにもランスでカール太子の国王戴冠をという民族主義的の命を成し遂げていたのであり、その彼女の果たして来た数々の人間の目に見える「行跡」(Tat)から判断していれば、あのような様な魔女追放という結論はなかった筈である。連戦連敗のフランス軍を逆転させた彼女の偉業は人間離れしたものであったから、それは神と共に為して来たに違いないと信じて来たが、彼女の父ティボの登場で悪霊の力を借りてのことで疑い出してしまったのだ。しかしそれは人間には知ることのできない彼女の「魂」内での「行為」(Handlung)を支配していたのを、神ではなく悪霊と見てしまった訳である。しかし、彼女の方もあの時、腕の傷は檜の大木があるドンレミを出奔した時ではなく、黒騎士との戦いで受けたものであると反論しなかったし、何よりもあの場で皆が期待していた一言、すなわち「私

は魔女ではありません」と否定しなかった。その理由は神の命を遂行しなかったライオネルとの一件にあり、神の遣いであるマリーアと乙女ヨハンナとの個人的問題で、彼女の「魂」の内の問題と考えてのことだろうか。

舞台上に戻ろう。そこでは、にっこりヨハンナが微笑んで<sup>あた</sup>廻りを見回し（シラーのト書き）、そして次の3詩行は、まるで魔女っ子呼ばわりで<sup>いじ</sup>苛められていた村の素朴な娘っ子がそれから解放されたかのような、あどけない<sup>てんし</sup>天女の言である。

ヨハンナ： 私は本当に私の国の人（Volk）に囲まれているわ、 3525  
 もう <sup>さげす</sup>蔑まれることも、追い出されることもないのね。  
 もう誰も私を呪ったりせず、私に親切な目を向けて下さるのね。  
 — 今すべてがはっきり見えるようになって来ましたわ。  
 これは私の国王さまね。フランスの旗がいっぱい見えますわ。  
 でも私の旗が見えません — どこにあるのかしら？ 3530  
 その旗がなければ、私は行けませんわ、私の師（Meister）に  
<sup>まか</sup>任された（vertraut）ものなんですから。その御座の前に  
 私はそれを置かねばなりませんの。私にはそれをお見せできる  
 筈ですわ、それを忠実に引き受けてまいりましたから。

彼女が旗を任されたのは彼女の師からだと言っているが、その旗は第1幕第10場で聖母に命じられた通り「子供のイエーゼスを抱いたマリーアが地球の上に浮かんでいる」（1159-61）絵を描かせたものである。それは彼女が戦場で軍の先頭に立って、イギリス兵をあの手でなぎ倒しながら指揮していた時、手にしていた旗である。しかしライオネルとの一件後、ランスでの国王戴冠式の行列を先導する時、<sup>いやいや</sup>嫌々ながら持たされたものであり、その式が催されている大聖堂にいたたまれず飛び出し、そこに残して来てしまった旗である。このように、ヨハンナは前半では「任された」旗を掲げていたが、後半では放棄していたのであり、一貫していなかった。同じようにマリーアから託されたものとして、あの聖剣があるが、ライオネルがヨハンナとの再会<sup>かた</sup>の形に取って行ったままで、彼女はこの場でそれを「任された」物とは思っていないようだ。

国王が兵に顔を向けて、「旗を彼女に渡してやれ」（3535）と命じ、それを受け取ると彼女は国王とブルグントが支えていた腕から離れ、旗を手一人ですっかり立ち、空にはバラ色の光が差し込んで来る。魔女裁判のとき雷鳴で始まった嵐が治まり、太陽が顔を出し、虹が出た訳である。

ヨハンナ： ご覧になって、空に虹が掛かっているでしょう？  
 天が黄金の門を開け、  
 天使の合唱に囲まれ、輝きながらあの方がそこに立ち、

永遠の御子を胸に抱き、  
微笑みながら、私に腕を伸ばして、招いていらっしゃる。 3540  
私、どうしたのかしら — 軽い雲が私を持ち上げ —  
重い鎧が羽衣になって、  
上へ — 上へ — この世は下へ下へ遠ざかって行くわ —  
短きは苦しみ、永遠なり喜びは、

彼女を迎えに来たのは旧約の神ではなく、旗に描かれたイエズスと聖母マリアであった。先述したようにマリアは新旧二柱の神に仕えていたのであり、イエズスは魔女裁判で雷鳴になってヨハンナに運命を課しただけで、彼女を自立させたまま、彼女の行為を見守り、ここで初めて姿を現し、自分の意に合った女として彼女を聖母マリアと共に迎えに来たと言えよう。国王らは自然現象の虹は見たであろうが、彼女を迎える二人は見えていないであろう。そして、そのフランス人たちは彼女がライオネルを愛し、それを人類一般に普遍化し、講和を求める政治的提案をしたことも知らないままである。次のト書きもそれを表していよう。「旗は彼女の手から離れ落ち、彼女はその上に死んで倒れて行く、— 皆は何とも言えない深い感動に襲われ、立ち尽くしている — 国王がちょっと合図をすると、フランスの旗が次々と彼女の上に掛けられ、彼女はそれで完全に覆われる」と。

ヨハンナの「魂」は「師」であるイエズスが迎える上へと昇り、下へと遠ざかって行く下界で彼女の肉体はあの旗の上に倒れ、その彼女をフランスの旗が包んだ。このようにシラーは上と下をはっきり描き分け、上へは「敵をも愛し」、「平和を求めた」世界市民ヨハンナの「魂」が昇り、下には自らの命を犠牲にして「民族の主権」を守った人民の乙女の肉体がフランスの旗に包まれて横たわっている。そして幕が下りる。

## おわりに

この拙論で私は、この劇の登場人物（Person, Charakter）はそれぞれの性格に従って登場し、そのキャラクターを演じ、舞台を去って行ったと書いてきた。トルボトは「機械的な唯物論で啓蒙された理性の人として」、<sup>10</sup> ティボは寒村の偏狭なキリスト教徒である心配性の父親として、デュノワは自然児で剛腕な騎士として、ソレルは個人カールを愛する女として、ファストルフは太子カールに、主人トルボトを自由の身で葬ってやるようにと命と自由を与えられたが、それを転機に自己転化できず元に戻り、侵略軍の戦死者として、イザボは我儘な性女として、ライオネルはトルボトと同じ物理学的理性に阻まれ、乙女の普遍の人間愛の域までは到達できなかった軍人としてである。カールは軟弱な太子から次第に人民の国王にまで至ったが、戦場での殺し合いから人類の「永遠平和のために」政治的提案をする「聖女」にまで自己形成（Selbstbildung）できたのはヨハンナであった。カールは魔女裁判を悔いたが、その乙女の人間一般にまで拡張し

た愛を知らない。しかし、神はそれを知っている、そしてこの劇の観客と読者もそれを知ることができよう。

しかし、エラスが書いているように、<sup>11</sup> 当時の上演で観客は戦場の騒音、雷鳴、戴冠式の行列などの劇的効果の壮観・華美に歓喜し、その本来の内容の理解には十分至れなかった。その初演後の歴史が示しているように独仏関係は民族主義の高揚と共に陰悪になり、ナチスの時代に至ってそれが極端化され、ヨハンナはドイツ民族の英雄と見なされる。すなわちフランス民族の旗に包まれた乙女しか見ていなかったと言えよう。

アブッシュ (Alexander Abusch) も彼女を人民と祖国のために戦うことの重要性を知らしめる模範としか見ていない。彼は歴史上の乙女の火刑という事実をシラーが最後の決戦で戦死するよう変更したことを捉え、「彼 (シラー、引用者) のジャン・ダルクは火の山に包まれて死んだのではなく、死にながらも白百合の旗 (Lilienbanner) を「正しい」戦争をしている自分の人民 (Volk) の前で、そしてイギリス征服者に対する勝利の際に掲げていたのだ」と書いている。<sup>12</sup> しかしヨハンナが掲げていたのはフランス国王家の白百合ではなくイエズスとマリーアの旗であり、そして彼女はそれを途中で放棄している。アブッシュはさらにライオネルとの一件後を大まかにこう叙述する。敵のライオネルを彼女の内に目覚めた「女の愛」のため殺さなかったことで彼女は罪を感じ、ランス大聖堂の広場で父親から告発され、国王に追放され、イギリスに捕らわれ、そこにフランス軍が押し寄せると、それ (Volk) を勝利に導きたいという意志が燃え上がり、ライオネルの愛をはねつけるあの能弁な演説者 (Sprecherin) になる、と。<sup>13</sup> そして、彼はその「演説」詩行 3348 から 3359 を引用している。先述したように、その「演説」を私は講和提案とも解したが、アブッシュは誤った「女の愛」の明確な否定としか解していないようだ。そして、「縛られていた鎖を切った乙女は、フランスの旗に勝利をもたらす」と彼は書いている。<sup>14</sup> 彼も民族主義的な乙女しか見ていない。あの魔女裁判さえも彼によれば彼女の「正しい」(私に言わせれば、狭い) 民族主義から「女の愛」への逸脱を単に咎めるだけのものになってしまう。

キリスト教では三位 (神と子と聖霊) 一体とされている。それに対して私は旧約の神と新約のイエズスをシラーはそっと分け、マリーアに二役を演じさせていると解して来た。エラスはナイーブな乙女がシラーにより現実社会に投じられ、苦悩する人間ヨハンナとして創造されたのだと解している。この狭い民族主義に陥らない彼の説には同意できよう。しかし彼は神を二柱に分けず、同じ神と解し、ライオネルとの一件を「ヨハンナはキリストの敵への愛という戒律を実現したが、それは神 (神々?) に対する服従より下位のものである」<sup>15</sup> と書き、最終幕第 11 場でのヨハンナの必死な鎖を切ってくれと言う祈りに「大きな奇跡が起こり、それにより神は彼女に再び自分と親密な関係になったことを知らせる」<sup>16</sup> と続けている。しかし、キリストの「敵を愛せ」と神の「敵は殺せ」はどちらも神の命であるが、内容は正反対で、それを戒律と神への服従で片づけられるだろうか。その後者の神の命に反し、不服従だったヨハンナに神は三重の鎖を切るという奇跡を起こすだろうか。それ故、私は「敵を殺せ」という旧約の神の狭い民族主義的な命か

ら、「敵をも愛せ」という新約のイエズスの人類愛にヨハンナは至ったと論じて来た。そして、魔女裁判中に彼女に運命を新しく課した神をそれまでの呼び方とは違う「私の師」と呼び出したのだから、二柱の神と取る方が合理的で、三位一体の唯一神への服従と戒律という上下の問題として済まされないのではないか。何よりも彼女は最後に「殺せ」という命に遅ればせながら服従するのではなく、自らを犠牲にして（敵を殺さないように聖剣ではなく人の作った剣を手に、逆に致命傷を負わされて）、国王を救ったのである。その事がそれを雄弁に語っているであろう。どうしても、その鎖を切るという奇跡には旧約神の子イエズスの仲介が必要と思われる。

最後に残った問題がある。あの旗を彼女は途中で捨てていたが、最後に「私の師に任されたもの」で、「それを忠実に引き受けてまいりました」と言っている矛盾である。新約聖書のイエズスは人間界に肉化して、つまり人間の姿で生まれ、弟子たちに「人間として如何に生きるべきか」を山上の垂訓などで説いたが、弟子の誰も彼を神の子であるとは信じなかった。彼の最も近い存在と見られていたペテロでさえ彼の弟子であることを3回否定し、鶏に鳴かれた。<sup>17</sup>彼は十字架に掛けられ、彼をそうしたローマ兵をも「父よ、彼らを許したまえ。彼らは何をしているのか分からないのですから」<sup>18</sup>と言って、死ぬ。その後彼は復活し、弟子たちの前に姿を現し、ようやく彼らは彼を神の子であったと知る。

旧約の神のように命令調にではなく、このような師として彼は彼女にあの旗を任したのであって、村から出奔した乙女は自分の意志で、その社会で「人間として如何に生きるべきか」を追求するようにと、つまり自己形成（Bildung）に自律して努めるようにという任務を課していたのだろう。マリーアは先ず旧約の神に仕え、狭いドンレミ村に自分の分を守って生きる父ティボと違って、素朴に自分たちの国王がフランスを治めるべきだと感じているナイーフな乙女ヨハンナを、フランスという広い世界に旧約の神の命と共に送り出し、そしてその乙女にあの旗が任された。その後は前述したとおりで、イエズスは彼女が目標とすべき自分の姿を旗の中で与えたが、彼女がどのように自己形成するかを見守っていたのであろう。そして彼女は運命的なライオネルとの出会いにまで突き進む。

彼との取っ組み合いの中で彼の兜が偶然はずれ、彼女はその高貴な顔を見てしまい、その後の進展は前述した通りであるが、これは果たして「偶然」だったのだろうか。前述でそっと触れた様に、第5幕第4場でヨハンナは魔女でなかったと知った許婚のライモントがその事を皆に知らせようと言うと、それを彼女は「運命」（3183）が熟せば自然と明らかになると断り、彼の方はそんな「偶然」（3188）まで待てないと苛<sup>いらだ</sup>立っていた。彼にとっての「偶然」は彼女にとっては「運命」が紡ぎ出す「必然」である。この兜脱落という「偶然」も彼女にあの旗を任した子イエズスが、彼女に旧約の父とは違う自分の目指す新しい道に進むよう、ソッとそうしたのではとも思われる。

彼女は神の命に反したと思い、その神と和解できる新しい道を師の課した「運命」に導かれて、自律的に歩み、最後に至ってその課題を果たし終え、あの旗を師に返すことができる筈だと確信する。そして、あの旗に描かれた将にその絵のように、彼女の師とその彼に仕えるように

なったマリーアが天空に浮かんで彼女を迎える。イエーzusが彼女の前に姿を現したのはこれが初めてであるが、それはあの旗で任された任務を人間の乙女として彼女が成し遂げたという事であろう。ヨハンナは民族主義的旧約の神の命を、(曲がりなりにもランスでの戴冠式で果たしていたのだが)、イギリスの侵略からフランスの独立と主権を守ったと言うことで果し、師の示した人類愛へと繋がる和平への政治的努力をし、自らを犠牲にしてまでもそれ(敵を殺さないということ)を貫き通したと言えよう。

ところで、シラーはこのロマン的悲劇を舞台にして、寒村出のナイフな乙女ヨハンナを色々な神々と霊と結び付けることにより、彼女を国王や大司教、侵略軍の司令官ライオネルなど様々な大物を相手に自由に生き生きと、さらに対等に行為させる自由を得たと言えよう。そういう特殊な神々との関係を確認しているからこそ、彼女は心の内に巣くっていた侵略者の横暴への憎しみをモントゴメリとの場で生き生きと表出できたし、カール太子と彼の側近の集まる陣営で侵略側と堂々と戦うよう説得できた。イギリス側に捕縛された塔内でも、師の課した運命を背に怯むことなくその侵略を批判し、政治的講和提案もできた。そういう神々との関係をすべて捨象しても、彼女の人間としての生き様<sup>さま</sup>、すなわち「人間とは何で、如何に生きるべきか」という課題をどう果たしたかは明らかである。あの時代にフランスで生きていた乙女ヨハンナは、ドンレミ村で侵略者の破壊、略奪、惨殺そして凌辱の噂話をいつも聞かされていたであろう。清純な彼女がそれに対して恐怖と憎悪を膨らませ復讐鬼となっていた。彼女をそうさせたのはまさにフランス国そしてドンレミ村の時代状況と風潮である。そしてそれはモントゴメリを前にして「復讐の時が来たのだよ」(1647f.)と言う台詞に表れている。旧約の神の「敵を殺せ」という命は、実はその時代状況と風潮が彼女の心の内に蓄積したものだ。日本でも戦中の空襲という状況下で鬼畜米英の感情が広まり、アニメ『螢の墓』では海軍の艦長である父を思い、「父ちゃんが仇を取ってくれる」と言う少年が描かれている。多数の軍国少年を創り出していたのだ。

しかしヨハンナは戦場で「敵を殺せ」という声に答えて、神の戦士として自分を励まし、その殺しを続ける中で、次第に心の内に疑問が湧き、戸惑うようになり、ライオネルとの遭遇でその極に達する。現在日本のテレビのドキュメンタリー番組で、ある兵士の告白を見たが、彼は日本に残して来た妻が、彼の出征後に生まれた赤ん坊と写し、送ってくれた二人の写真を見るのを楽しみにしていた。彼は或る日、上官に捕えた女を「銃剣で刺殺しろ」と命じられたが、それは子連れ之母で、彼は銃剣を腰に構え、その女を目がけてタッタッタと走る。しかし後一步という所で、彼の目にはそれが写真の母子と重なり、どうしても足がそこで止まってしまった。そう、老齢になった元日本兵は語っていた。ヨハンナも素顔のライオネルを見、彼に止めを刺せなかった。それを契機に自分のこれまでの行為を悔やむようになり、この戦争を止めようと、政治的解決に望みをかけるが、・・・その後は前述したとおりである。

こうして見ると、シラーのこの劇の主人公もゲーテの『ファウスト』の主の言葉、「人間努力する限り、間違いを犯すものだ」、「わしは彼(ファウスト)をやがてすべてははっきりする境地に導いてやるつもりだ」と言う同じ意味をあの旗に託して任されたのであり、レッシングの神の左

手の内のものを受け取り、あの時代のあのフランスで真理を目指して自己形成（Bildung）に励んだと言えよう。日本ではそのドイツ語の >Bildung< を「教養、教育」と訳し、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』やヘッセの長編小説を『教養小説』（Bildungsroman）と呼んでいるが、主人公が社会に出て、色々な経験を積んで自己を形成し、成長する様を書いたものである。将に自己を「形成する」（bilden, 形成する, sich bilden 自分自身を形成する）である。戦争体験から自らの所業を悔いて平和を求めたヨハンナは師の課した運命に導かれて、自己をあゝの地点まで形成したと言えよう。

カントは『永遠平和のために』（Zum ewigen Frieden）を1795年に出版している。シラーのこの作品完成の6年前である。ここでカントはこう書いている。「（大小を問わず）独立して存在するいかなる国家（Staat）も他国家によって、遺産相続、交換、購入、または贈与を通して獲得され得ない」と、<sup>19</sup>そして、その根拠として国家は所有物ではなく、人間の社会（Gesellschaft）であり、一つの道徳的人格（Person）であるからとしている。そして彼は国家を一本の木に例えて、それは自分自身の根を持っているので、他国に接ぎ枝をするような合併・併合は、その人格を物件（Sache）にするようなものと批判している。シラーの王妃イザボは英王室と自分の娘を政略結婚させ、その娘の子にフランス人民の社会という根から切り離し、フランスを接ぎ木として、遺産相続としてイングランドに併合しようとするものである。<sup>20</sup>シラーの『オルレアンの乙女』ヨハンナはパリでのその併合を象徴する幼児国王戴冠に反対し、フランス人民社会に根を持つ生粋の国王誕生を願っていたのである。<sup>21</sup>そして、戦場に出て行き、戦いによらない政治的解決の道を模索するまでに至る。

カントは一強の世界支配による平和ではなく、主権を持った各々の民族国家が平等・対等に併存しながら、生起する諸問題を戦争によらず、平和裏に解決する枠組みを国際連盟（Völkerbund）として提唱する。第一次世界大戦後にできた国際連盟はこのカントの提案を基にできたと言われている。カントは平和を求めて哲学者としてこの書を残し、シラーはこの劇で詩人としてこのロマン的悲劇を人類に提供していると言えないだろうか。そしてカントの書名、『永遠平和のために』と和訳されているが、彼は本題に入る前に短くその由来をオランダのある旅館の看板から取ったと書いている。そこには墓地の絵が描かれ、屋号として >zum ewigen Frieden< と書かれていた。ドイツ語の前置詞 >zu< は屋号に付けられるもので、それは「永遠平和屋」旅館となり、客はゆったり安すらぎ、ぐっすり眠られる宿泊の保証を表しているが、その旅館の主人はイロニーを利かせて墓地を描かせたのだ。確かに墓に眠る兵士は戦いから永遠に解放されている。平和という言葉は戦争という現実があるから存在するのであって、カントも現実の王侯、政治家、軍人を見れば、この哲学的提案により簡単にそれが実現されるとは思わず、「永遠に平和を求めて」というイロニーを込めて、このタイトルを付けたのだろう。シラーのこの主人公も、いつ狭い民族主義の英雄としての乙女ヨハンナから解放され、平和を求める世界市民と見做される様になるのだろうか。

完